

下関ゆかりの画家

桂ゆき

鑑賞ガイド



《狐と狸》油彩・板、1973年

下関市立美術館

©Shimonoseki City Art Museum, 2013

# 桂ゆきさんってどんなひと!?

## ダイジェスト

### 下関ゆかりの画家

桂ゆきは東京生まれの東京育ちですが、下関ゆかりの画家として知られています。それは桂ゆきの父が長府（下関市）の出身であったためです。その祖先もまた長府で暮らしていました。桂家は、代々長府毛利家に仕えた上級藩士の家系です。また父弁三は、高名な治金学者で、桂ゆきは厳しいしつけとともに不自由のない幼少期を過ごしています。



### 前衛の女流画家 ～豊かな交友関係～

桂ゆきは、コラージュをその根幹に置きながらも、一見ただけでは同一人物の手によるものとも思えないほど、多彩な表現を展開しました。

そのような彼女の芸術を支えたもののひとつに、豊かな交友関係があります。彼女の才能は同時代の巨匠たちに認められ、初期の段階から作品を世に発表する機会を得てきました。1934年、師の中村研一のすすめで二科展に《帰り道》（山口県立美術館蔵）を出品するも落選してしまいます。このとき、審査員の東郷青児がひとり反対して落選となった、という逸話が残されています。これは彼女の才能を買っていた東郷の指導だったのかもしれませんが。1935年、海老原喜之助のすすめにより、銀座の近代画廊でコラージュの個展を開きます。その三年後には、藤田嗣治の口添えで日動画廊で個展を開きました。このときのパンフレットには、藤田の言葉のほか、東郷青児の言葉も載せられています。そのほかにも瀧口修造やジャン・コクトーなど実に多くの人とのつながりがありました。こうした豊かな人間関係が、彼女の芸術の開花を助けたことは想像に難くありません。

## 単身アフリカへ！

桂ゆきはたいへん行動的な女性でした。自由な発想をもって作品を作ったのと同じように、自由なライフスタイルをもって人生を謳歌したともいえます。

その極めつけは、「女ひとり原始部落に入る」です。1956年9月に渡仏した桂ゆきは、足かけ6年、海外生活を送ります。58年にはアフリカに旅行をし、現地の人と交流しました。アフリカから彼女が大切に持ち帰ったもののひとつに、現地の人に書いてもらった絵が何十枚もあります。帰仏後すぐにアメリカにわたり、その約3年のちに日本へ帰国しますが、この気ままな海外生活はその後の制作活動にも影響しています。



## いろいろな素材をつかったユニークな作品

桂ゆきは既成の概念にとらわれずに、いろいろな素材を自由に組み合わせ、作品を作り出すことにすぐれていました。コラージュの可能性を彼女ほど深く追求した画家がほかにいたでしょうか。そのまなざしは、作品を構成する素材や、描きだすモチーフの両方向に等しく貪欲だったのでしょうか。

《作品（うちわ）》は、その通りうちわを画面に貼りつけた作品です。持ち手の柄の部分分割して2つ並べて貼り付け着色しています。それだけなのになんとかおかしみが生まれています。桂ゆきの作品では、あらゆるモノに生命が宿っているような考え方が感じられます。



《作品（うちわ）》油彩、コラージュ・キャンバス、1963年

# コラージュ

桂ゆきのコラージュ作品は、彼女の繊細な感覚が大きく作用しているといえるでしょう。またそれはモノに興味を持ち、蒐集するという彼女の性癖とも直接的に結びついた、ごく自然な到達点でもありました。

「もう二昔も前の夏、その頃学校がお休みにになると、毎年行っていた三浦の海岸で、私は鮫か鯨か、兎に角両手で抱える程の大きさの頭蓋骨を見つけた。風波にさらされて、程よい質感の白っぽいのが、ひどく気に入って無理をして東京に持ち帰った。私の「初のオブジェ」である。」（「私のオブジェ」『アトリエ』307号より、1952年）

桂ゆきは、1930年代、海老原喜之助に出会い、自分が試みていたものがキュビズムやダダに始まるコラージュというものであることを知りました。

また1933年、東郷青児のアヴァンギャルド洋画研究所に通い、斎藤義重ら同世代の芸術家から刺激を受けたといいます。新進気鋭の芸術家たちが集まった会に参加したことから、新しい芸術を模索しようとする思いが芽生えました。このことは右下に紹介した作家自身のことば（コルクとの出会いについての回想）からも明らかです。



《作品》コラージュ・紙、1936年

## リアルな表現力



《手紙》油彩・キャンバス、1936年

桂ゆきは高等女学校時代、日本画家の池上秀畝に手習いを受けます。当時の手習い帳には繊細な花の絵や鳥の絵が残されています。その後中村研一に師事し、油絵の基礎を学びます。また岡田三郎助にもデッサンの指導を受けています。

コラージュを油絵で表現した作品は、1930年代後半頃に、コラージュ作品の制作とともに多く描かれました。このようなリアルな油絵が描けたのは、彼女の手先の器用さと前述のような基礎学習が関係しているのでしょう。

《作品A（たまねぎ）》色鉛筆・紙



コラーージュの技法をつかった作品は、のちに油彩画と融合します。キャンバスにしわしわの和紙を貼りつけ着色した作品や、布や新聞をあたかもそこに貼りつけているように見える油絵を描いたり、布の端切れを絵の具のように使い画面を構成するものなど、いろいろなコラーージュのバリエーションが生み出されました。



《作品》コルク、綿、紙・キャンバス、1978年



《作品》油彩・キャンバス、1978年

## コルクとの出会い

「(1935年の近代画廊での) 個展のあと、あるとき二階から屋根瓦を目近く見下ろしていて、あるショックみたいなものを感じた。同形の瓦の起伏が規則的に際限もなく連続してひろがっている、といっただけのことだったが、私は瓦とは関係のないある画面みたいなものを予感して、なんとなくガタガタ身がふるえた。それがどうしたことなのか、さっぱり分からないままに胸にひっかかって、とても苦しくてたまらなかった。(中略)

私は苦しまぎれにウロウロとそこいらを歩き、ある日、遠くの工場裏のようなところで、捨ててあるコルク屑に出会った。栓を打ち抜いたあとの四角い小立体は、全部同形で、たくさんあった。あっと思い、あわてて拾い集めて持ち帰った。夢中でありあわせの板に、一つ一つ隅から隅までびっしりと貼りつめた。できあがりを見ながら、こんな作品は今までどこにもないだろうと、一人で悦にいった。」

(「コルクのもつ意味」『美術手帖』451号より、1979年)

# 油彩画

桂ゆきは女学校時代、どうしても油絵を習いたくて、「日本画を習うことは女のたしなみのひとつだから許されるけれど、油絵は女のすることではないといわれますが、絵をかくことに変わりないではありませんか。魚は焼いてもよいがフライにすることはいけないというのと同じで、それでは理屈が通りません」と父親に訴えたという。しかし父は「親のいうことは絶対服従」と厳しく言ったといいます。「それで女学校を終えると、私は小遣いをためて、油絵具を買い、勝手に自分で油絵を描きだした」といいます。(以上引用はすべて「孝行と油絵」(親と子随筆)より)

右の作品を見ても分かるように、一見して同一作家の手による作品とは思えないほど多様です。社会を風刺したような作品やフォルムを誇張したような作品など、ときにキャラクターに変換されたり、抽象画に変換されたり、立体化されたりしながら表現されています。

「私のなかに表現者として、いいたいことがたくさんあるでしょう。言語でそれができないから作品で、それを発表する。表現したいものがありすぎて、それがストレートに画面に出る。目茶苦茶に関係のないことまで画面に顔を出す。ですから私の絵は説明的でポスターのようなものです。」(「聞き書き桂ゆき(インタビュー)」『桂ゆき展』(下関市立美術館)図録より、1991年)

物質性を追求したようなリアリティある画面、重量感を取り除いた画面、キャラクターズティックに社会を風刺したような作品、そのどれもが彼女の本質であるといえるのです。



《作品2》油彩・キャンバス、1940年



《作品》油彩・キャンバス、1960年



《雀の学校》油彩、紙・板、1973年

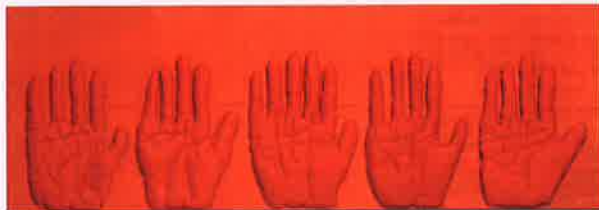
# もみ 紅絹

1985年ににわか登場した「紅絹」の作品は、大きく2種類の造形に分類されます。ひとつは立体物で、大小さまざまなサイズのお釜や下駄、ワインボトル、かばん、その他意味を持たない形などを紅絹でくるんだものです。もうひとつは、壁にかける作品で、立体モチーフを針金で組み合わせたものと、紅絹で覆った板などに綿を入れて立体化した手形などを貼りつけた作品（下図）、または四角や三角、丸の形のモチーフを組み合わせて貼りつけたものがあります（右図）。これらは、彼女の制作初期から芽生えていた布などを画面に貼るというコラージュの技法から発展したひとつの結実とも、あるいはその延長上の作品群ともいえるでしょう。

桂ゆきは紅絹の作品を制作するにあたって、身近にあるあらゆるものを活用しました。綿をくるみ立体化させたもののほか、食品トレイやプラスチックのパック、紙箱などをくるんだもの、または発泡スチロールを自由に形成してくるんだものを組み合わせて、作品に仕立てているのです。お釜からしゃもじへ、しゃもじから下駄へ、またはお釜から弥次郎兵衛へ…と派生し、これらの身近なモチーフが作品となりました。

彼女はこれらの作品、とくにお釜のことについて雑感を述べています。それは昭和の初めごろの回想記でもあります。「ある寒い3月の早朝、私は山の宿の寝床の中で鶯の声をきいた。（中略）私は幸福な気持ちで寝床を離れ、流し場に行った。そこに置かれていた普通の形の、ご飯を炊くお釜をなんの気なしにみているうちに、その形が真面目なのにどこか滑稽味のある、よいものに感じられ、お釜というものにかつてなく執着を覚えた。そして、大昔からこれでご飯を炊いて生きたさまざまな人のありさまを感動とともに思いうかべた。さい前の寝床では生きものの同胞の横のつながりを感じたのだが、

今度は昔からの縦のつながりを痛感したのである。紅裏の着物で、襷がけの昔の女性が井戸端で米を磨ぐ姿なども思われた。」（『お釜のことなど』『伊奈ギャラリーパンフレット』より、1985年）



《手相》紅絹、1985年

## プロフィール



桂ゆき (1950年撮影)

- 1913年 東京に生まれる、本名雪子。  
父は下関出身の冶金学者桂弁三。
- 1926年 東京府立第五高等女学校に入学。  
この頃池上秀敏に日本画を学ぶ。
- 1931年 中村研一に師事し本格的に油絵を学ぶ。
- 1933年 光風会展に入選。古賀春江、東郷青児らが主催するアヴァンギャルド洋画研究所に通い、帰国したばかりの藤田嗣治にも指導を受ける。
- 1934年 二科展に出品するが落選。
- 1935年 海老原喜之助にすすめられて近代画廊でコラージュの個展を開く。  
二科展に入選 (以後毎回出品)。
- 1938年 藤田嗣治のすすめにより日動画廊で個展を開く。吉原治良、山口長男ら二科会会員とともに九室会を結成。同会顧問は藤田嗣治と東郷青児。
- 1946年 三岸節子らと女流美術家協会を結成。
- 1947年 戦前の九室会、自由美術家協会、美術文化協会の画家たちによって組織された日本アヴァンギャルド美術家クラブに、幹事のひとりとして参加する。
- 1949年 女流美術家協会賞を受賞。
- 1956年 渡仏し 1961年までヨーロッパ、アメリカに滞在。この間アフリカに行き猛獣狩りを体験、また美術以外のさまざまなアルバイトもする。一方でイヴ・クライン、ジャン・コクトー、ジャン・ジュネ、サム・フランシス、マーク・トビーなど、多くの現代芸術家とも交流する。
- 1960年 全米女流展に出品。この年から和紙などを貼った抽象作品を制作。
- 1961年 帰国。第6回日本国際美術展で優秀賞受賞。この年二科会を退会。
- 1962年 アフリカ・アメリカ体験をもとに書いたエッセイ『女ひとり原始部落に入る』を出版。(翌年、毎日出版文化賞を受賞)
- 1966年 第7回現代日本美術展で最優秀賞を受賞。
- 1974年 エッセイ集『狐の大旅行』を出版。
- 1980年 山口県立美術館で「桂ゆき展」開催。
- 1991年 急性心不全のため死去。下関市立美術館で「桂ゆき展」開催。
- 2013年 生誕100年を記念して、東京都現代美術館と下関市立美術館にて「桂ゆき展—ある寓話—」が開催される。